

スクールカウンセリングの現状と課題 (2)

— 「スクールカウンセラー」に関するイメージ調査 —

The Study of Today's Problems on School Counseling (2)

— Research for the Image of "School Counselor" —

浦木 恵子*・大西 俊江**・高見 友理***

Keiko URAKI

Toshie ONISHI

Yuri TAKAMI

要 旨

島根県内の教師524名, スクールカウンセラー (SC) 21名に「スクールカウンセラー」に関するイメージを自由記述してもらった。結果を校種別 (小, 中, 高), スクールカウンセラー導入校別 (「終了群」「2年目群」「1年目群」), 統制群 (非導入校), SC群の12グループに分けて各群の特徴を図示し, 教師とスクールカウンセラーのイメージの共通点と相違点を明らかにし, スクールカウンセリングについて検討した。

[キーワード] スクールカウンセラー 教師 イメージ スクールカウンセリング KJ法

I. はじめに

今日の教育現場において, スクールカウンセリングの重要性はますます増大している。

筆者らは, 本紀要別稿「スクールカウンセリングの現状と課題(1)」において, 教師とスクールカウンセラーに実施した意識調査の結果をまとめた。

本稿では, 一連のアンケートから教師はスクールカウンセリングをどのようにとらえているか, またスクールカウンセラー自身はスクールカウンセリングをどのようにとらえているかを「スクールカウンセラー」に対するイメージをたずねることによって, 両者のイメージの共通点と相違点を明らかにし, スクールカウンセリングの現状と課題に迫ることを目的とする。

II. 研究方法

1. 対象

島根県内の教師 524名 : アンケート配布 888名 回収数 524名 (回収率 59.0%)

スクールカウンセラー 21名

2. 調査の実施

(1)実施時期 1997年10月～11月 (2)実施者 高見 友理 (島根大学)

(3)実施方法 スクールカウンセラーについては個別に手渡し, あるいは郵送形式で実施

* 島根大学大学院教育学研究科 ** 島根大学教育学部心理学研究室
*** メディカルカウンセリングセンター福田クリニック

した。教師に対しては学校単位で、郵送形式、個別形式で実施した。教師には無記名で、スクールカウンセラーには記名式で行った。

3. 質問内容

「スクールカウンセラーに関するアンケート」(高見1998)の中で「スクールカウンセリングの現状と課題(1)」で分析しなかった項目。

『「スクールカウンセラー」という言葉から思いつくことを自由に、できるだけたくさん書いてください。』(自由記述式)

4. 分析方法

まず、教師から得られた回答を、小学校、中学校、高等学校の各校種別に「統制群」「1年目群」「2年目群」「終了群」の11グループに分け(高校終了群は未調査)、スクールカウンセラーのグループ(SC群)の回答と合わせて12グループに分けた。

なお、「1年目群」とは、スクールカウンセラーが配置された初年度の学校である。アンケート実施時は配置から実質6か月前後である。「2年目群」とは同じく配置から2年目の学校で、アンケート実施時は配置から実質1年6ヶ月前後である。「終了群」は2年間の配置期間が終了し、アンケート実施時には学校にスクールカウンセラーはいない。「統制群」は、スクールカウンセラーが配置されたことのない学校である。

各群のデータ(自由記述式で得られた回答)をKJ法によって以下の手順で分類した。

(1)データを一つの意味単位に区切る。(これを最終データ数とする)(2)類似したデータ同士をグループにする。(3)グループに見出しを付ける(4)各グループを空間配置する。(5)各グループを更に大きなグループに分ける。〈カテゴリーに分類〉(6)図式化する。

III. 結果

質問に対する教師群・SC群の回答者数及び回答率、データ数は、Table 1 に示す通りである。

Table 1 質問に対する回答者数及び回答率

	学校数	対象者数	回答者数(%)	データ数
小学校1年目群	4	94	52 (55.3)	129
小学校2年目群	2	35	25 (71.4)	58
小学校終了群	1	32	27 (84.4)	79
小学校統制群	1	31	19 (61.3)	56
中学校1年目群	5	137	70 (51.1)	183
中学校2年目群	2	56	22 (39.3)	71
中学校終了群	1	31	17 (54.8)	44
中学校統制群	1	45	9 (20.0)	22
高等学校1年目群	3	201	83 (41.3)	184
高等学校2年目群	2	106	58 (54.7)	144
高等学校統制群	2	120	46 (38.3)	104
SC群		22	21 (95.5)	184
合計	24	910	449 (49.3)	1258

「校種別」「群別」12グループのデータをカテゴリーに分類した結果は、Figure 1～Figure 12に示す通りである。各グループ毎に、類似したデータを集め「見出し」を付ける作業の結果、グループによってデータ総数は違っていても同じ「見出し」を付けることができた。さらに、図式化による全体構造もほぼ同じものが得られた。図中の、*印は生のデータである。()内の数字はデータ数を示す。

小学校2年目群の図式化(Figure 2)により、全体構造を説明すると次のようになる。「」内は、生のデータの記述である。

スクールカウンセリングとは、専門的知識や技術を持った「心理の専門家」が、「こころの拠り所」である「相談室」で、「定期的・継続的」などの勤務条件の下で、「外部からの専門家」として「教師とは違う立場」に立って、「親」や「子ども」の抱える「不登校・いじめ・悩み・学校不適應・不安」などの問題を、「相談」「指導」したり、「困ったときの救い手」となり、援助することである。「相談」は、プライバシーを尊重するため、「守秘」が原則である。目標は「こころをいやす」ことである。現時点で感じているスクールカウンセラーへの印象は、「安心・心強い」感じで、今後どのような働きをしてもらえるのか「期待感」がある。反面、スクールカウンセラーという「長い呼び名」「言葉から来る硬いイメージ」があって、教職員にとっては、まだまだ身近な存在ではない。

それぞれの「見出し」は、構造を踏まえてTable 2に示すように、カテゴリーとして分類することができた。

Table 2 主な個別データとカテゴリー分類表

カテゴリー		主な個別データ
(1) 資質 どのような資質を持つのか?	① 専門家	心理専門, 臨床心理士, 医師, アメリカのスクールカウンセラー, 心理療法士, 心の医者, 治療者, 相談のプロ, カウンセラー, 僧侶, 母親
	② 知識	心理療法, 心理, ロールプレイ, サイコドラマ, 構成的エンカウンター, 情緒, 臨床心理, カウンセリング研修, 心理学, 心理判定, ころ, 専門知識
	③ カウンセリングマインド	カウンセリングマインド, 受容, 共感, より添う, 中立, 柔軟性, 積極的関心, 待つ姿勢, 調整能力
	④ 人柄	やさしさ, 暖かさ, 思いやり, 包容力, 親身
	⑤ 場所	学校, 相談室, ころの拠り所, 家庭, 病院, 個室, 保健室, ざんげ室, ブラックホール
	⑥ 立場	第三者, 教師とは違う見方, 孤立, 学校外, 評価しない, フリーな立場, 人間として対等, 人対人, クッション
(2) 制度		定期的, 継続的, 学校に派遣, 常駐, 先進的, アメリカに比べ資格が曖昧, 社会認識が確立していない, 文部省, 各校1名
(3) 対象(誰の?)		子ども, 保護者, 個別, 養護教諭, 教師, 気になる生徒, 非行生徒, 学校全体
(4) 問題(なにを?)		不登校, いじめ, 悩み, 集団不適合, 学校の悩み, 不安, ころの病気, 問題行動, 望ましい学校生活を送るために, 人間関係, 家庭の問題, 進路
(5) 活動内容・どうするのか	① 相談	相談, カウンセリング, 教育相談, 相談役, 気軽に相談に乗ってくれる
	② よく聞く	話を聞く, 聞き役, 話し相手, 自由に話せる
	③ 助言	指導, アドバイス, 助言
	④ 援助	支え, 援助, ころのケア, ころのパートナー
	⑤ 安定	気持ちの安定, はげ口, ストレス解消
	⑥ 解決	方向性の示唆, 解決策を考える, 解決の糸口, 指針を与える, 悩みの解消
	⑦ 教師援助*	教師への指導・助言, 学校経営・生徒指導の相談, 担任の支え, 教師の相談, コンサルタント
	⑧ 調整	パイプ役, 連携, 調整役
	⑨ 守秘	守秘, 秘密厳守, 秘密保持
	⑩ 理解	理解, 児童理解, 生徒理解
	⑪ 共に	共に歩む, 共に考える
	⑫ その他	医療的取り組み, 子どもの友達, 診断, 治療
(6) 目標		癒し, 心の開放, ころの教育, 人間関係作り, 心の成長, 開かれた学校, 解放, 自己発見
(7) 評価	① プラス	有意義, 心強い, 安心, 期待, 助かる, 頼れる, 必要, 各学校に欲しい, 時代が要求, 学校の変化, 光, 救世主, 大変な仕事
	② 疑問点	よく分からない, 本当に必要か, 担任とのずれ, 教育活動に位置づいていない, 教員だって余裕があればできる, 他者への依存, 不信感, 身近でない, いまさら, よい事ではない, 閉鎖的, どれだけの生徒が相談するか, 現実問題の解決の力になりにくい, 必要ない
(8) その他**		聞いた事がない, 思いつかない, 試行錯誤, 放課後, 休み時間

* 教師援助は、「児童、保護者、教師の相談」などの様に羅列した記入ではなく、特に教師のみを取り上げ、教師を強調している場合を別に分類した。

** 時間についてはデータが2個のみだったので、便宜上その他に分類した。

大カテゴリーを校種別に比較した結果は、Table 3に示す通りである。

小中高とも、①活動内容 ②資質 ③問題 の順に多かった。高校は、他の校種に比べ「問題」に関するイメージが多かった ($P<0.01$)。小中学校教師は、「いじめ」「不登校」「悩み」などのイメージをあげたが、高校教師は、それに加えて「情緒不安定」「男女交際」「友人関係」「精神病」等より具体的で多様な問題をあげている。高校教師が直面している問題が推察できる。スクールカウンセラー群(以下SC群)は、①資質 ②活動内容 ③問題の順に多く、教師群のイメージと比較すると1位と2位が逆転している。教師は、具体的に「何をする」人かに最も注目し、スクールカウンセラーは、「活動内容」より「資質」に関心が高いといえる。

Table 3 大カテゴリー校種別比較

	小学校計	中学校計	高校計	全体	SC
(1) 資質	102 31.4%	108 35.0%	112 25.5%	322 30.0%	66 35.9%
(2) 制度	5 1.5%	10 3.2%	7 1.6%	22 2.0%	15 8.2%
(3) 対象	11 3.4%	5 1.6%	9 2.0%	25 2.3%	19 10.3%
(4) 問題	45 13.8%	31 10.0%	106 24.1%	182 16.9%	31 16.8%
(5) 活動内容	131 40.3%	120 38.8%	145 33.0%	396 36.9%	42 22.8%
(6) 目標	6 1.8%	9 2.9%	11 2.5%	26 2.4%	0 0.0%
(7) 評価	25 7.7%	26 8.4%	48 10.9%	99 9.2%	6 3.3%
(8) その他	0 0.0%	0 0.0%	2 0.5%	2 0.2%	5 2.7%
合計	325	309	440	1074	184

「資質」について校種別に比較した結果は、Table 4の通りである。

小学校は、①カウンセリングマインド ②知識 ③専門家 の順に多い。中学校は、①専門家 ②立場 ③人柄 の順。高校は、①専門家 ②人柄 ③場所 の順。場所については、単なる「相談室」という物理的な存在としてではなく、「こころの居場所」「投げ所」「ざんげ室」など、機能に注目したイメージが挙がっている。SC群は、①立場 ②人柄 ③カウンセリングマインド の順に多い。

小中高全体つまり教師群とSC群の比較では2つの大きな特徴がある。1番目は、SC群では、教師群で上位に上がっている「専門家」イメージに対する回答が低く($P<0.01$)、「知識」に関するイメージは皆無である。SC群は自らを「専門家」と位置づけ、「専門的知識」を前面に出して意識している者は少ないといえる。2番目は、SC群(30.3%)は、教師群(17.1%)に比べ「立場」に関する回答が多い($P<0.01$)ことである。具体的なデータを比較すると(Figure 1~12)、教師群は「学校外の立場」「教師とは違う視点」「評価しない」「フリー」「第三者」「人対人」などをあげているのに対し、SC群は「教師とは違う」「個性を認める」などと共に、「部外者」「根無し草」「居候」「不自由」「不安定」「無力」「とても大変」「安全感に乏しい」な

どマイナスイメージが想起されている。SC群で多かった「カウンセリングマインド」には、教師群でも挙がっていた「受容」「中立性」だけではなく、「積極的関心」「待つ姿勢」「安定性」など、専門家だからこそ想起できるイメージが挙がっている。さらに、スクールカウンセラーとして必要と考えられる「社会性」「協調性」「調整能力」等も挙がっている。「人柄」に関しては、教師群と同様に「やさしさ」「暖かさ」などがある反面、「従順」「無個性」「うさんくさい」「難しいことをいう」などのマイナスイメージも挙がっている。

Table 4 資質について：校種別比較

	小学校計	中学校計	高校計	全体	SC
(1) 専門家	18 17.6%	28 25.9%	32 28.6%	78 24.2%	3 4.5%
(2) 知識	19 18.6%	14 13.0%	15 13.4%	48 14.9%	0 0.0%
(3) カウンセリング マインド	24 23.5%	14 13.0%	8 7.1%	46 14.3%	14 21.2%
(4) 人柄	16 15.7%	19 17.6%	24 21.4%	59 18.3%	16 24.2%
(5) 場所	13 12.7%	6 5.6%	17 15.2%	36 11.2%	13 19.7%
(6) 立場	12 11.8%	27 25.0%	16 14.3%	55 17.1%	20 30.3%
合計	102	108	112	322	66

資質について群別に比較した結果はTable 5の通りである。

統制群は、①専門家 ②立場 ③知識・場所の順に高い。1年目群は、「専門家」「カウンセリングマインド」「立場」が同率で上がっている。2年目群は、①「人柄」 ②専門家 ③知識の順に多い。終了群は、「専門家」と「人柄」が同率で並び、続いて「場所」と「立場」が同率で続いている。以上のことから、スクールカウンセラーが入っていない統制群や、配置されて間もない1年目群では、スクールカウンセラーは「教師とは視点が違う」「学校外」という「立場」の「専門家」であるという意識が高い ($p < 0.05$)。2年目群、終了群になると「人柄」に関するイメージが多くなる ($p < 0.01$)。

教師群の「専門家」「知識」に関するイメージは、群別差異はほとんどない。「カウンセリングマインド」に関するイメージは、1年目群 (20.5%) と比較すると、2年目群 (10.1%) ・終了群 (9.5%) とともに減少している ($P < 0.01$)。Figure 1～12により、具体的なデータを見ると、各校種とも統制群、1年目群では「カウンセリングマインド」「受容」「共感」などの教科書的な言葉が目立つが、2年目群、終了群では、それに代わって「寄り添う」「思いやり」「心をほぐす」「親身」「穏やか」など人柄を表現するような柔らかい言葉が多くなっている。「立場」に関するものは1年目群 (20.5%) と比較すると2年目群は (11.2%) 減少している ($p < 0.01$)。終了群 (14.3%) で再び増えているように見えるが、Figure 1～12により各群別のデータ内容を具体的に調べると「立場」に関する記述内容が大きく変化していることが分かる。1年目・2年目群では小中高とも「第三者」「教師と異なる視点」が大きく意識されているが、終了群では、「クッション」「人間として対等」「個人対個人のつながり」「生徒の立場に

立つ」などの記述に代わっている。

Table 5 資質について：群別比較

	統制群	1年群	2年群	終了群	SC
(1) 専門家	16 35.6%	30 20.5%	22 24.7%	10 23.8%	3 4.5%
(2) 知識	6 13.3%	22 15.1%	14 15.7%	6 14.3%	0 0.0%
(3) カウンセリング マインド	3 6.7%	30 20.5%	9 10.1%	4 9.5%	14 21.2%
(4) 人柄	5 11.1%	20 13.7%	24 27.0%	10 23.8%	16 24.2%
(5) 場所	6 13.3%	14 9.6%	10 11.2%	6 14.3%	13 19.7%
(6) 立場	9 20.0%	30 20.5%	10 11.2%	6 14.3%	20 30.3%
合計	45	146	89	42	66

活動内容について校種別に比較した結果は、Table 6の通りである。

活動内容中の各カテゴリーを分類した結果、小中高とも「相談」に関するイメージが50%前後を占める。次に「よく聞く」、続いて「援助」「助言」に関するものが多い。

SC群は、①よく聞く(19.0%) ②相談・教師援助・援助(各14.3%)と大差はない。

教師群とSC群を比較すると次の相違点がある。

第1に、SC群は「助言」「解決」に関するものが皆無である。教師は「助言」に関するイメージ、つまり「指導・アドバイス・助言」や「解決」つまり「方向性の示唆・指針を与える・悩みの解消・解決の糸口」をスクールカウンセラーに期待しているが、SC群は、「指導、助言」「解決」よりも、「よく聞く」「相談」「援助」として「共に考えて」行こうとしている ($P<0.01$)。

第2に、SC群には「守秘」に関するイメージが挙がっていない。カウンセラーにとって、プライバシー保護のために守秘義務は当然と言えるが、教師群にとっては、スクールカウンセラーという刺激語から「守秘」は直結する。カウンセラーの属性として特別なものという意識があるのかもしれない ($P<0.01$)。第3に、SC群は教師群に比べ、「教師援助(14.3%)」($P<0.05$)、「調整(14.%)」($P<0.01$)が高い。教師援助の内容は「コンサルテーション・カンファレンス・教職員研修・生徒指導上」である。

Table 6 活動内容：校種別比較

	小計	%	中計	%	高計	%	全体	%	SC	%
① 相談	71	54.2%	61	50.8%	65	44.8%	197	49.7%	6	14.3%
② よく聞く	14	10.7%	16	13.3%	23	15.9%	53	13.4%	8	19.0%
③ 助言	8	6.1%	6	5.0%	10	6.9%	24	6.1%	0	0.0%
④ 援助	12	9.2%	9	7.5%	15	10.3%	36	9.1%	5	11.9%
⑤ 安定	0	0.0%	7	5.8%	0	0.0%	7	1.8%	0	0.0%
⑥ 解決	5	3.8%	5	4.2%	9	6.2%	19	4.8%	0	0.0%
⑦ 教師援助	9	6.9%	0	0.0%	11	7.6%	20	5.1%	6	14.3%
⑧ 調整	4	3.1%	1	0.8%	2	1.4%	7	1.8%	6	14.3%
⑨ 守秘	3	2.3%	5	4.2%	3	2.1%	11	2.8%	0	0.0%
⑩ 理解	2	1.5%	4	3.3%	0	0.0%	6	1.5%	0	0.0%
⑪ 共に	2	1.5%	0	0.0%	2	1.4%	4	1.0%	2	4.8%
⑫ その他	1	0.8%	6	5.0%	5	3.4%	12	3.0%	9	21.4%
合計	131		120		145		396		42	

活動内容を群別に比較した結果は、Table 7の通りである。

群別においても「相談」に関するものが50.0%前後であり、ついで「よく聞く」「援助」「助言」に関するイメージが多い。

Table 7 活動内容：群別比較

	統制群	%	1年群	%	2年群	%	終了群	%	SC	%
① 相談	32	50.0%	93	48.9%	48	51.6%	24	49.0%	6	14.3%
② よく聞く	11	17.2%	25	13.2%	11	11.8%	6	12.2%	8	19.0%
③ 助言	6	9.4%	12	6.3%	3	3.2%	3	6.1%	0	0.0%
④ 援助	3	4.7%	18	9.5%	8	8.6%	7	14.3%	5	11.9%
⑤ 安定	0	0.0%	5	2.6%	2	2.2%	0	0.0%	0	0.0%
⑥ 解決	1	1.6%	12	6.3%	5	5.4%	1	2.0%	0	0.0%
⑦ 教師援助	7	10.9%	8	4.2%	5	5.4%	0	0.0%	6	14.3%
⑧ 調整	1	1.6%	5	2.6%	1	1.1%	0	0.0%	6	14.3%
⑨ 守秘	0	0.0%	2	1.1%	7	7.5%	2	4.1%	0	0.0%
⑩ 理解	1	1.6%	2	1.1%	1	1.1%	2	4.1%	0	0.0%
⑪ 共に	0	0.0%	2	1.1%	0	0.0%	2	4.1%	2	4.8%
⑫ その他	2	3.1%	6	3.2%	2	2.2%	2	4.1%	9	21.4%
合計	64		190		93		49		42	

評価について、校種別に比較すると Table 8の通りである。

小学校では、プラス評価が若干上回り ($P < 0.05$)、中学・高校では、評価に有意差はない。スクールカウンセラーは、自己評価として「臨床心理のあり方を問われている」という前向きなもの、と、「理解されていない」「学校社会は嫌い」など陰性感情が表出したものがあった。

Table 8 評価について：校種別比較

	小学校計	中学校計	高校計	小中高計	SC
① プラス	16	15	22	53	2
	64.0%	57.7%	45.8%	53.5%	33.3%
② 疑問	9	11	26	46	4
	36.0%	42.3%	54.2%	46.5%	66.7%
合計	25	26	48	99	6

評価について、群別に比較するとTable 9の通りである。

統制群は「プラス」イメージより「疑問」に関連したイメージが多い ($P<0.05$)。1年目群には有意差がなく、2年目群・終了群は「プラス」イメージが多い ($P<0.01$)。また、1年目群と比較すると2年目・終了群の「疑問」に関するイメージは減少し、「プラス」イメージが増加している ($P<0.01$)。具体的には、「安心・頼りになる・心強い」などの実感が表現されるようになり、「大変な仕事」とスクールカウンセラーに対する理解を深め、「欠かせない存在」として「期待」されるようになっている (Figure 1~12)。

Table 9 評価について：群別比較

	統制群	1年目群	2年目群	終了群	SC
① プラス	5 29.4%	17 41.5%	19 67.9%	12 92.3%	2 33.3%
② 疑問	12 70.6%	24 58.5%	9 32.1%	1 7.7%	4 66.7%
合計	17	41	28	13	6

制度について、Figure 1～Figure 12により、詳細を見ると、教師群は、「定期的」「継続的」「兼務」「学校へ派遣」など枠に関するものがほとんどで、中学校1年目群にのみ「アメリカに比べ資格が曖昧」「社会認識が確立しない」とやや内容的なものも出ている。

SC群は、枠以前の問題として、制度そのものに対する評価が多く挙がっている。「明るい」「発展的」「実務的」などのポジティブな評価と「いまさら」「小手先」「理論的基盤が弱い」「文部省の批判回避」「問題のすり替え」「評価基準に危惧」というネガティブな評価の両面が挙げられていて、スクールカウンセラー自身が制度そのものに疑問を持っていることが分かる。

IV. 考察

アンケートの質問内容である「スクールカウンセラーという言葉から思いつくこと」とは、「スクールカウンセラー」という刺激語から想起するイメージのことである。ここには、回答者の関心のありようが表現されていると考える。

結果から次のようなことを考察した。

校種別では、高校が他の校種に比べ「問題」に関する回答数が多いという特徴が見られた。小中学校教師も「問題」に関連するものとして、「いじめ」「不登校」「悩み」などをあげたが、高校教師は、それに加えて「情緒不安定」「人間関係」「精神病」「怠学」「問題行動」等、より具体的で多様な問題をあげている。小中学校では、生徒も「不登校」という表現でしか問題を表面化することができなかったのが、高校になると様々な形で問題を表面化させる。高校教師は「スクールカウンセラー」という刺激語から日常的に直面している様々な問題を想起したものと考えられる。

次に、教師群、SC群の関心がどこにあるのか大カテゴリー別に見ると、教師群は①活動内容 (36.9%) ②資質 (25.5%) であったのに対し、SC群は①資質 (35.9%) ②活動内容 (22.8%) だった (Table3)。

さらに、「資質」の下位カテゴリーにおいて、教師群は「専門家」に、SC群は「立場」に注

目するという差異が見られた (Table 4)。SC群の「立場」には、「部外者」「居候」「不安定」「不自由」などのマイナスイメージが挙がっていることも大きな特徴である。(Figure 12)。

以上のことから、教師群は「専門家」としてのスクールカウンセラーの「活動内容」に期待しているのに対し、SC群の関心は「立場」にあり、しかもマイナスイメージとして意識している。スクールカウンセラーは、学校という初めてのフィールドに出て、今までの臨床場面でのアイデンティティが揺さぶられ、新たなアイデンティティを組み立てていく過程での戸惑いの中にあるといえるのではないか。さらに、この「アイデンティティの揺らぎ」は、SC群が「制度」そのものにも疑問を持っていることにより、複雑さを増してくる。SC群は、この制度を「理論的基盤が弱い」「問題のすり替え」(Figure 12)と意識しながらも制度の中で「専門家」として動いていかざるを得ない矛盾を抱えている。

「活動内容」の下位カテゴリーで、教師群は「相談」49.7%「よく聞く」13.4%に対し、SC群は「よく聞く」が19.0%で、「相談」「教師援助」「調整」がそれぞれ14.3%だった。SC群は、教師群以上に「教師援助」「調整」を意識していることが分かる。スクールカウンセラーは、「週2回4時間」「訪問する」という枠の中での効果的援助は「教師援助」や「調整」だと考えているのではないか。また、教師群は「助言」「解決」を合わせると10.1%だが、SC群では0%だった。この結果は、教師群の専門家に対する期待の大きさを現わしていると共に、専門家の介入により即座に何らかの解決が得られると考えているためではないか。

「資質」の下位カテゴリーを見ると、スクールカウンセラーが入っていない統制群(教師)や、配置されて間もない1年目群(教師)では、スクールカウンセラーの「立場」(「違う立場」「教師とは視点が違う」「学校外」)への関心が高い($P < 0.05$) (Table 5)。「専門家」「知識」は配置からの期間が違っても大きな変化は見られない。

このことから、教師群は「スクールカウンセラー活用実施要領」の趣旨通り、配置からの期間に関係なく、「教師とは視点が違う」「高度に専門的知識と経験を有するスクールカウンセラー」に対する期待が大きいといえる。

2年目群、終了群になると「立場」よりも「人柄」に関するイメージが多くなる。また、1年目の「カウンセリングマインド」は、2年目、終了群では減少し($P < 0.05$)、終了群になると、実際のスクールカウンセラーとの人間関係を通して感じた「人柄」を表現する柔らかい言葉へと変化している。

「評価」については、配置されていない統制群で、否定的イメージをあげるものが最も多かった。1年目群は「疑問」の方が若干多いが、有意差はない。2年目、3年目と疑問は減少し「プラス」イメージが増加している。

以上のことから、スクールカウンセラーは、教師から「知識を持った」「専門家」として、大きな期待が寄せられているだけでなく、配置からの時間の経過と共に、体験を通して肯定的に受け入れられているといってよい。これはスクールカウンセラーに対する理解の深まりと広がりと考えることができる。

以上のように、教師はスクールカウンセラーに期待し、ほぼ肯定的に捉えていることが分かった。それに対して、スクールカウンセラーの方は、職務以上に立場に注目し、制度に対する疑問も含めてまだまだ試行段階で、混沌とした状態であると認識していることが分かった。

また、「知識や技術を持った専門家は、指導・助言・アドバイスをを行い、問題を解決することができる」と考える教師と、「指導」「解決」よりも「教師援助」「調整」に注目しているスクールカウンセラーという点にもずれがある。教師が期待するような即座の判断を出していくことがスクールカウンセラーの専門性なのか、SC群のように「解決」よりも「援助」の姿勢で関わる方が、より「解決」につながるのか。それは個々の事例によって違うのかもしれない。

いずれにしてもスクールカウンセラーは、専門家として介入する以上、教師群の疑問点として挙げた「本当に必要か」「不信感」「問題解決になりにくい」「他者への依存」等に、実践を通して真摯に答えていかなければならない。

文 献

- 1) 高見友理(1998) スクールカウンセリングの現状と課題 平成9年度島根大学大学院教育学研究科修士論文
- 2) 浦木恵子(1999) 教師及びスクールカウンセラーがとらえたスクールカウンセリングの実際と課題 平成10年度島根大学大学院教育学研究科修士論文

Figure 1 個別データ分類結果

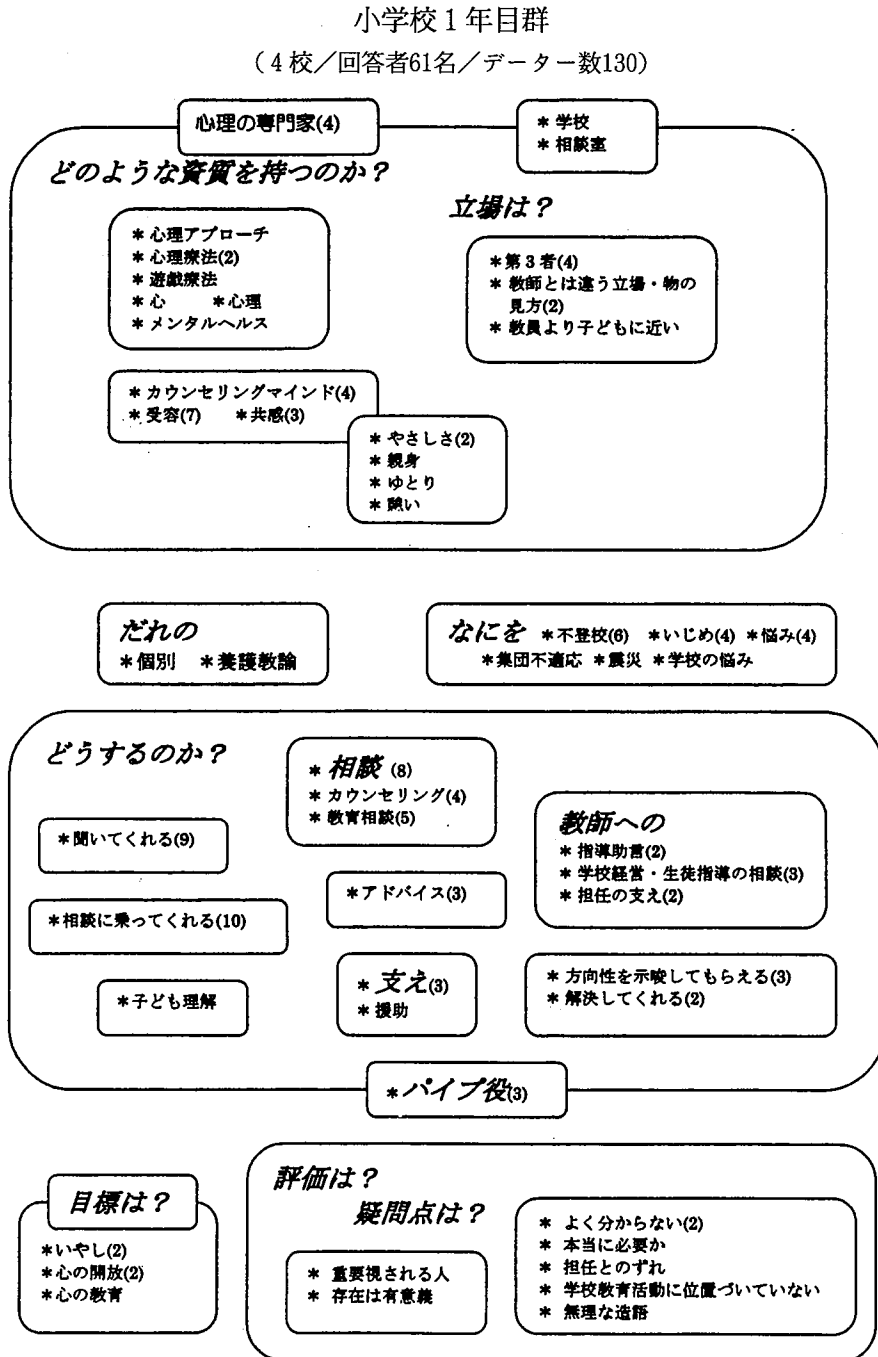


Figure 2 個別データ分類結果

小学校2年目群

(2校/回答者28名/データ数58)

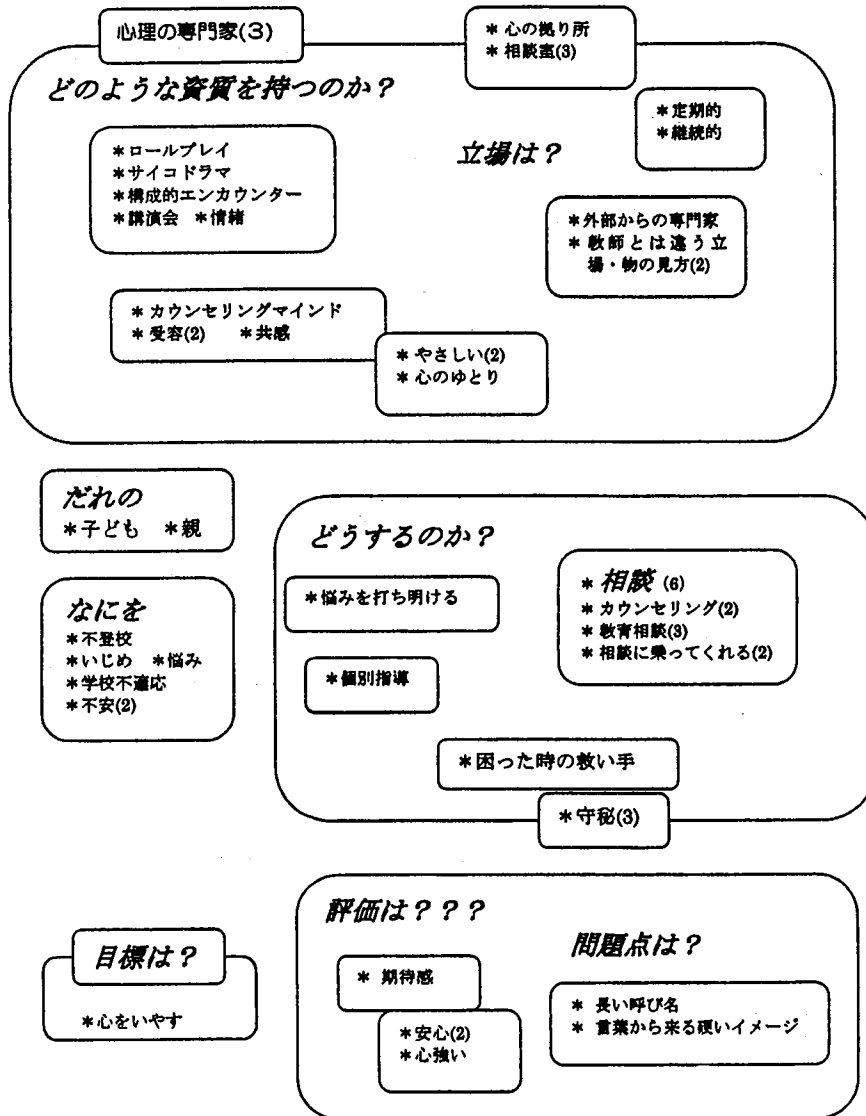


Figure 3 個別データ分類結果

小学校終了校

(1校/回答者27名/データ数82)

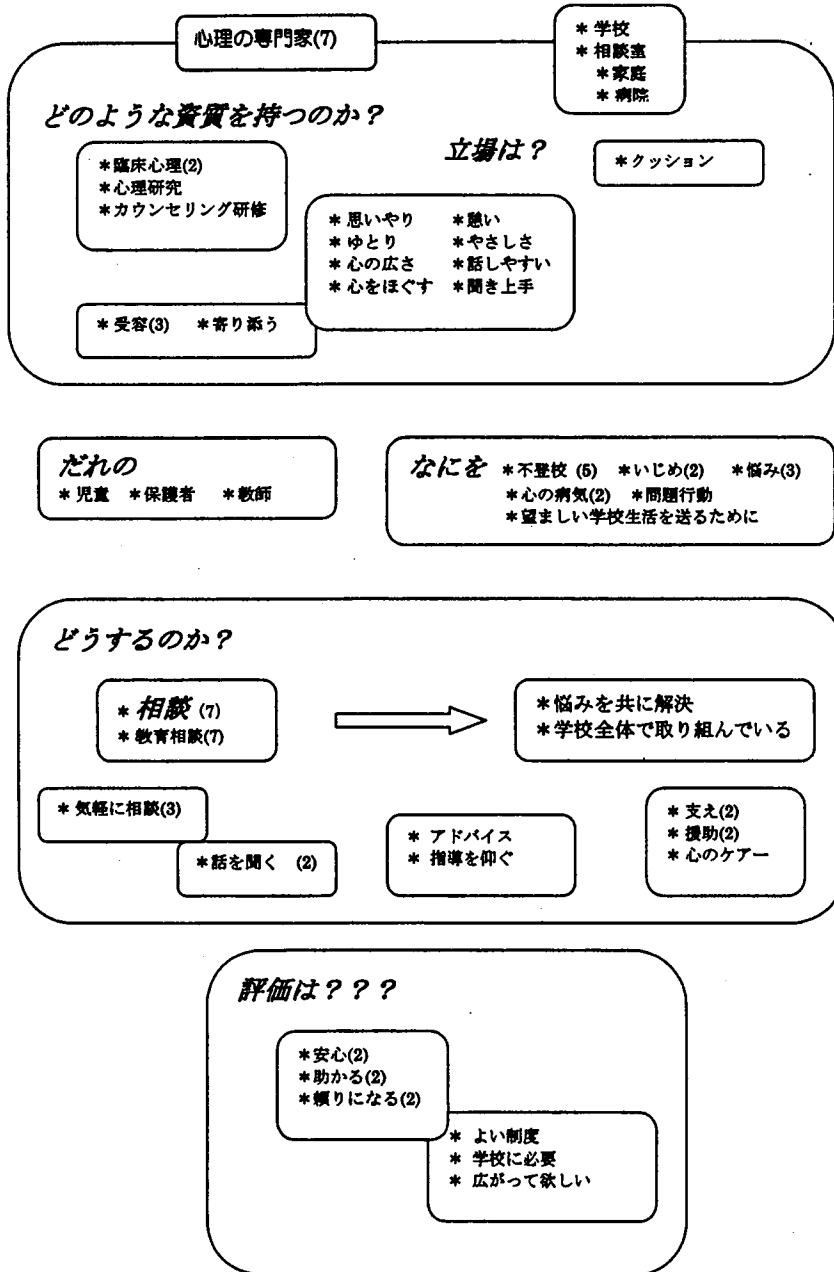


Figure 4 個別データ分類結果

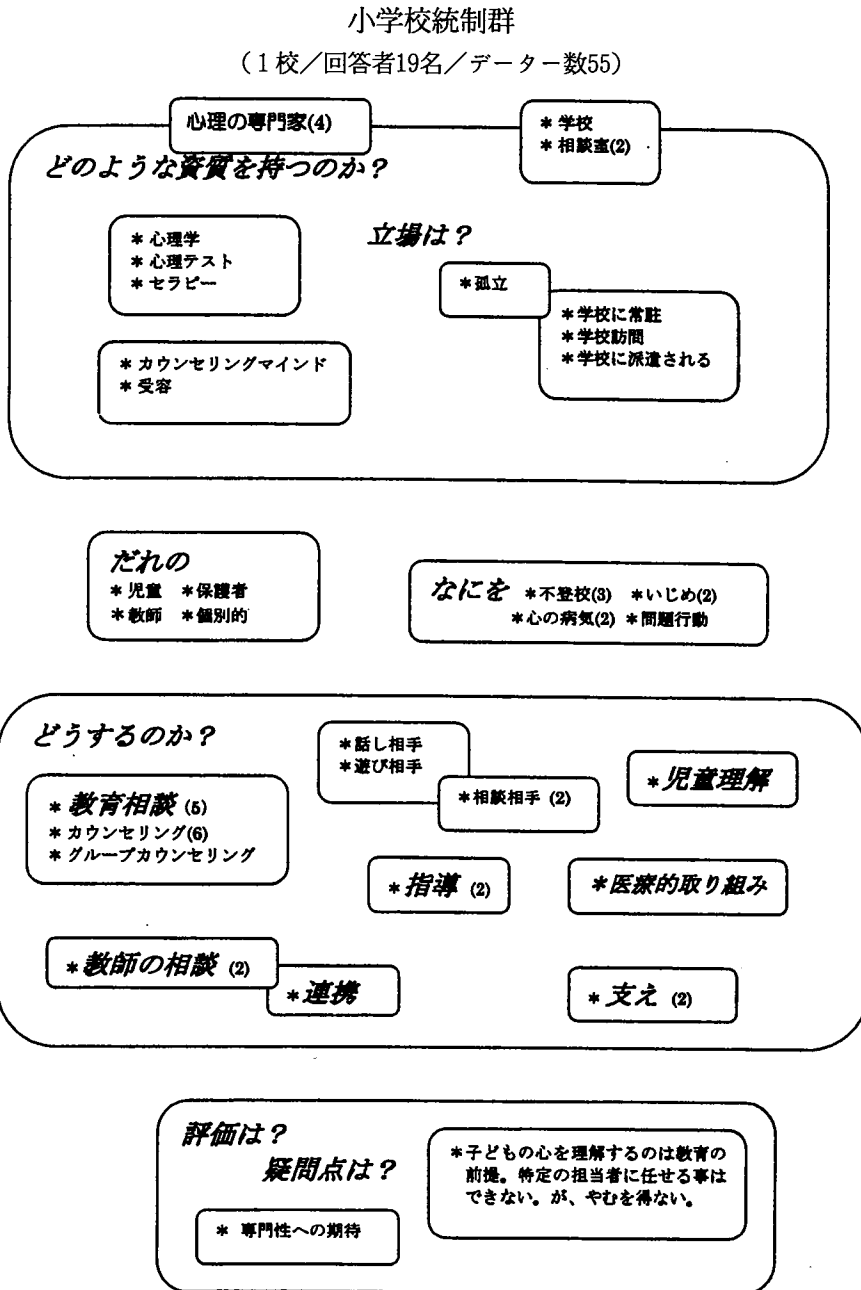


Figure 5 個別データ分類結果

中学校1年目群

(5校/回答者70名/データ数183)

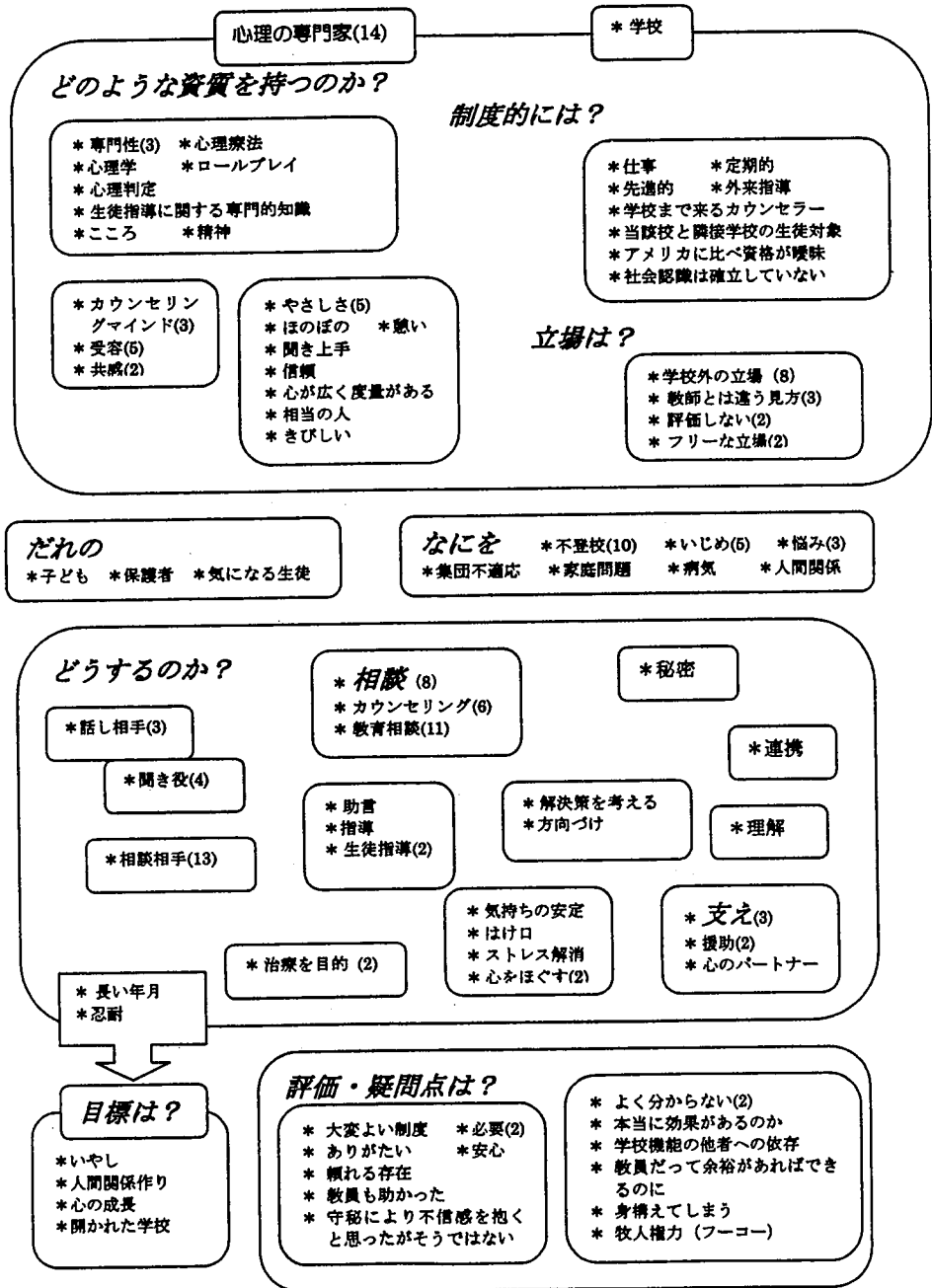


Figure 6 個別データ分類結果

中学校2年目群

(2校/回答者22名/データ数58)

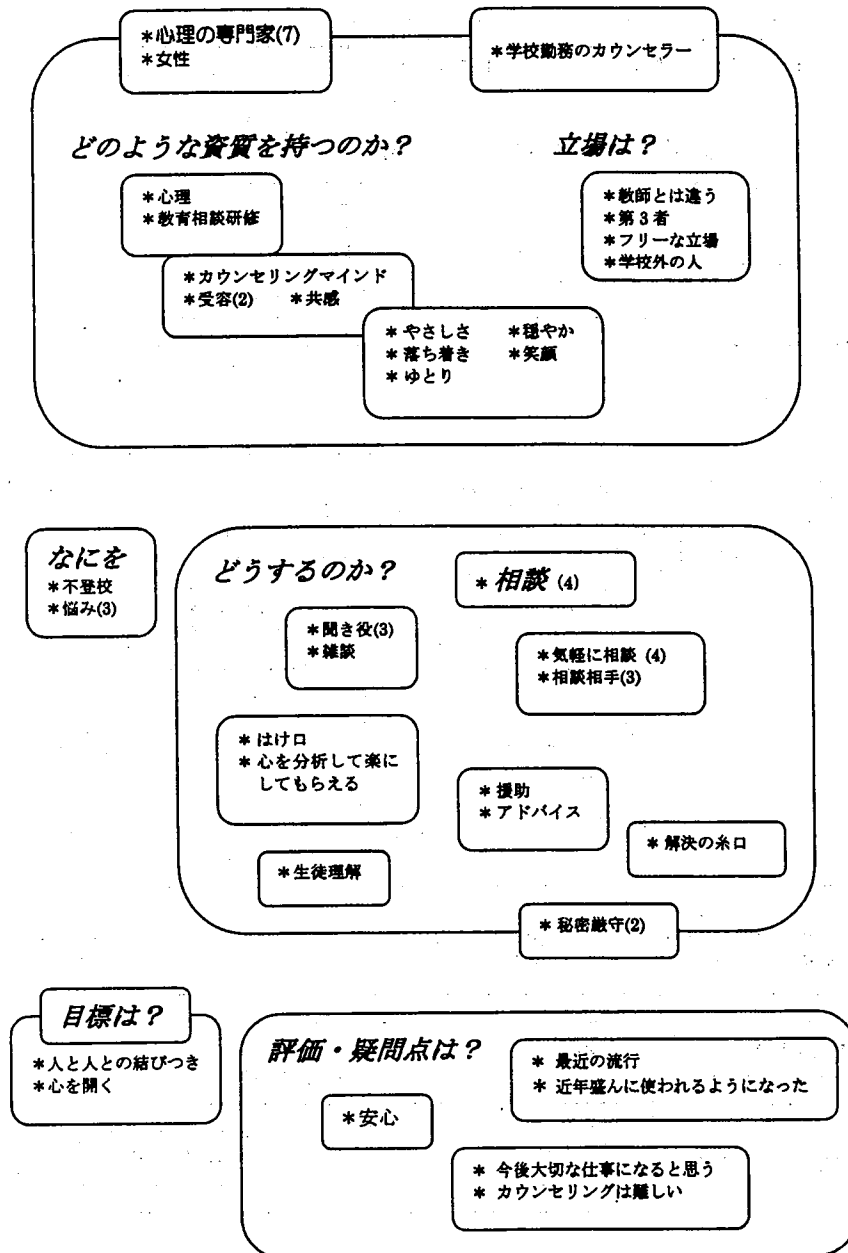


Figure 7 個別データ分類結果

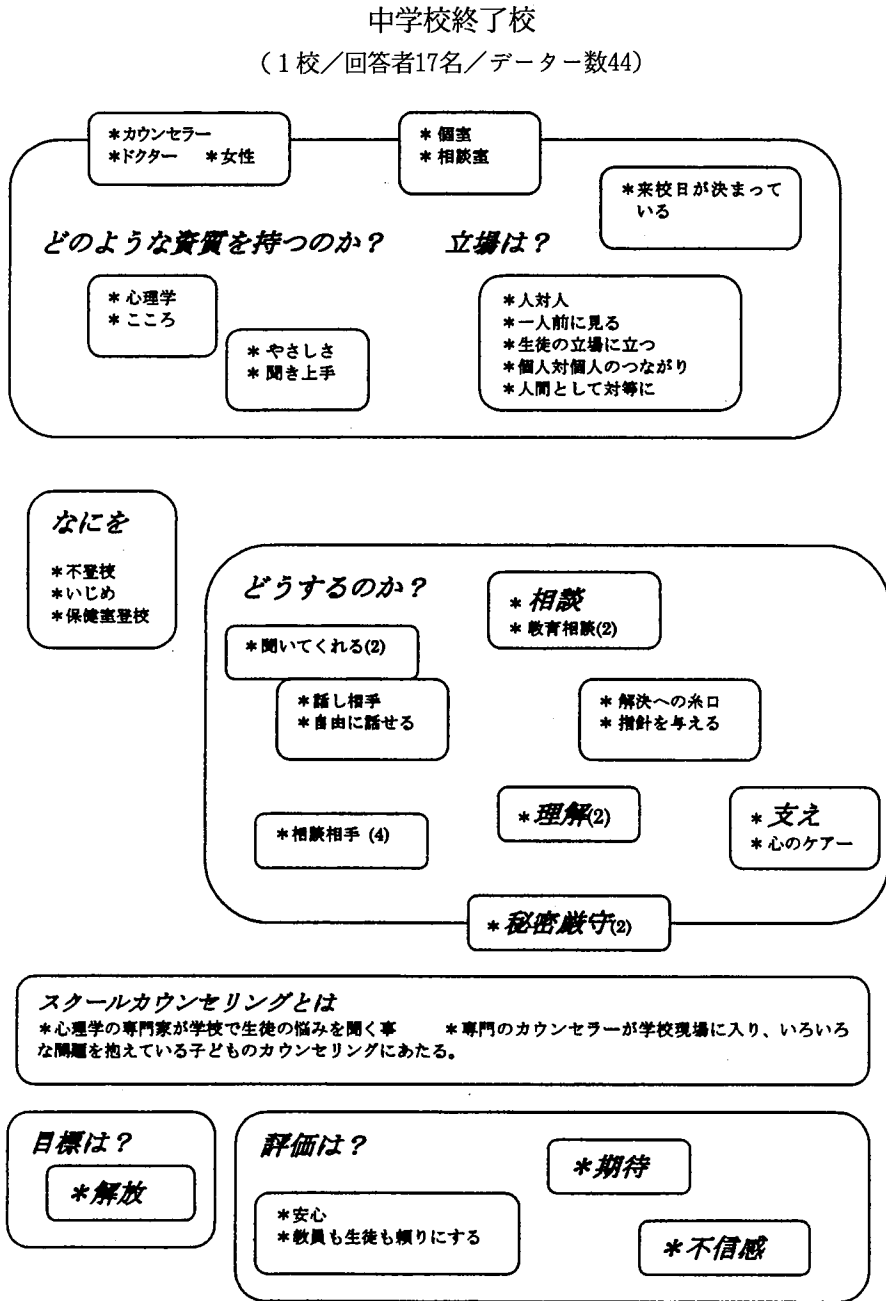


Figure 8 個別データ分類結果

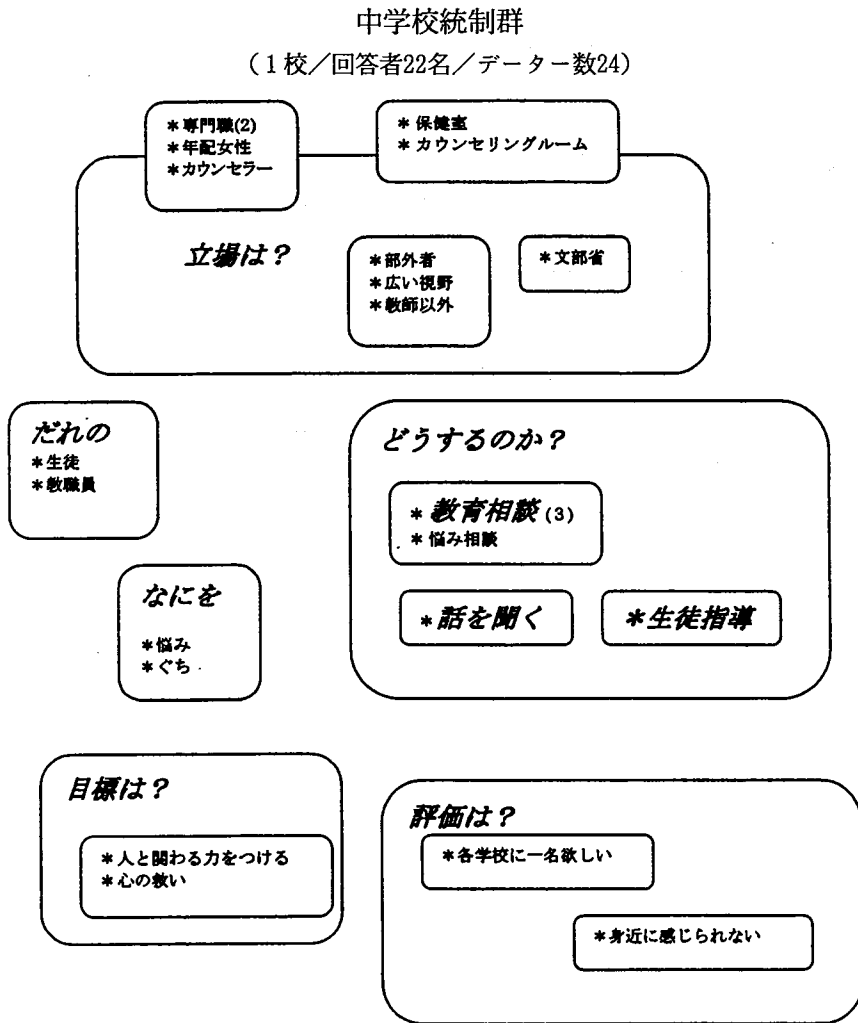


Figure 9 個別データ分類結果 高校1年目群 (2校/回答者83名/データ数186)

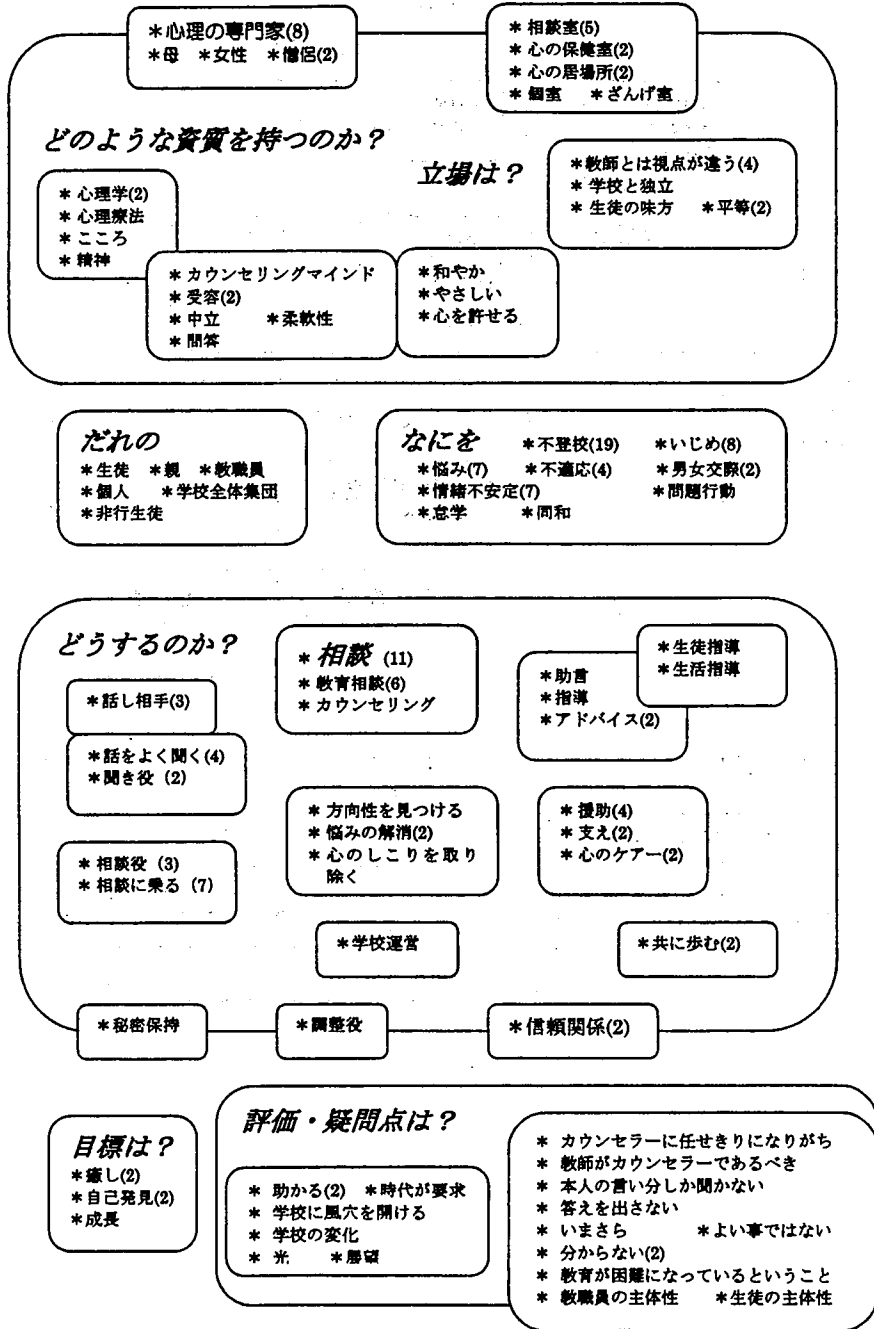


Figure 10 個別データ分類結果 高校2年目群(2校/回答者58名/データ数148)

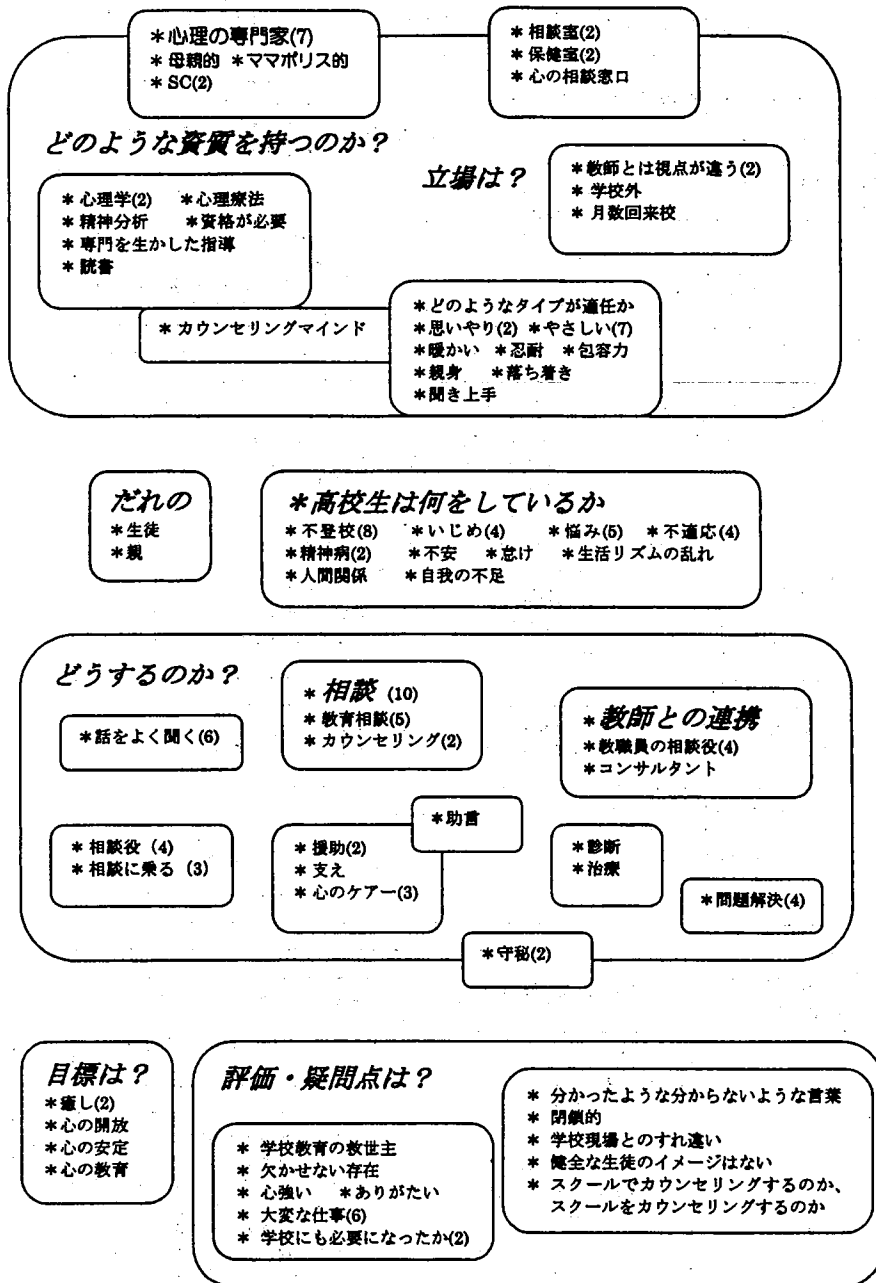


Figure 11 個別データ分類結果 高校統制目群（2校/回答者46名/データ数106）

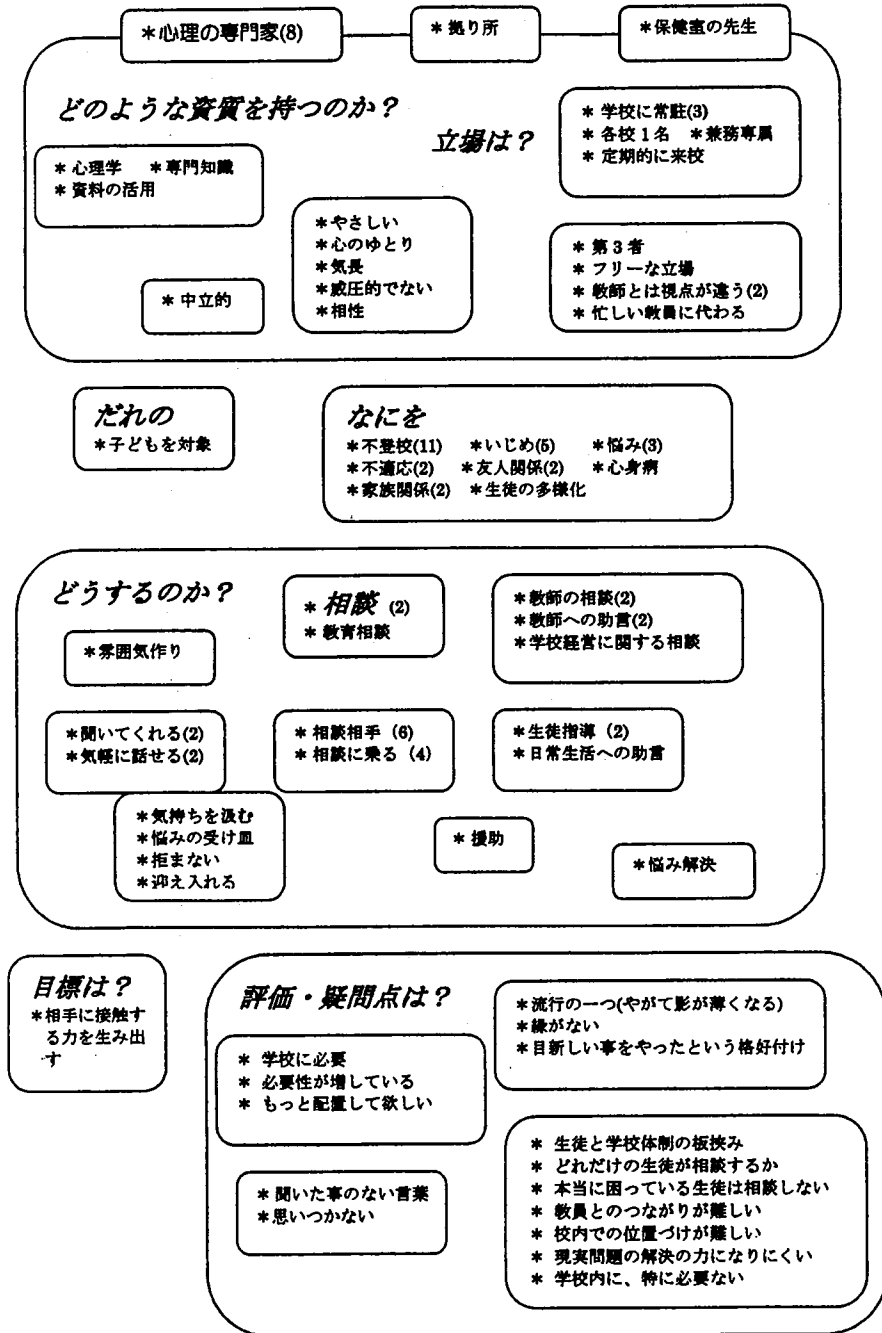


Figure 12 個別データ分類結果
 スクールカウンセラー経験者
 (回答者21名/データ数184)

